

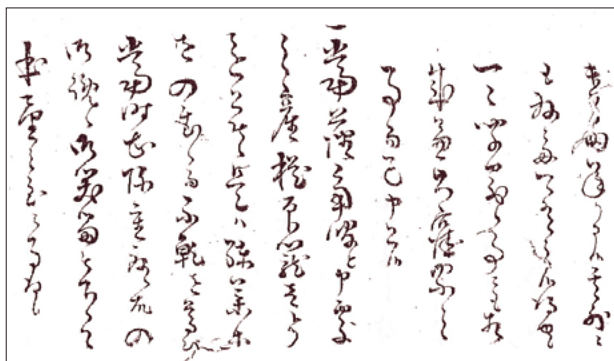


記憶の交流

～移封後の佐竹家中と常陸～

慶長7年（1602）、長く常陸国を拠点に活動してきた佐竹氏は、突然出羽国への移封を命じられます。以後佐竹氏は出羽国秋田藩20万石を領する大名として江戸時代を過ごし、付き従った家中たちも常陸の地を離れることになりました。もっとも、佐竹氏やその家中と常陸との関係が完全に途絶えてしまったわけではなく、江戸時代以降もいくつかの交流がおこなわれていました。

江戸時代に入り、秋田藩では家譜編さん事業が実施されます。その過程で由緒調査のために秋田藩士が常陸国に派遣されたことはよく知られていますが、こうした藩の事業に触発された家中たちも、かつて住み暮らした常陸国に思いを馳せていきます。秋田に残された記録を見ていくと、常陸国に由緒を持つ佐竹家中たちが個別に常陸国を訪れていたことが分かります。彼等は秋田藩に伝わる記録から自家の由緒地を調べ、その情報をもとに常陸国との接点を探し出します。やがて江戸時代後期になると、こうした取り組みは常陸国との直接的な接触・交流へと発展し、同じ苗字を持つ家との系図照合などをとおして一族として新たな関係を結ぶこととなります。



▲秋田藩小室家からの書翰(部分)(小室彬家文書 274) 角館(秋田県仙北市)で作られる樺細工が送られている



人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館 特任准教授
天野 真志
近世史部会 協力員

常陸大宮市域でも佐竹家中との交流は確認されます。『美和村史』でも紹介される下檜沢村の小室家は、佐竹氏の秋田移封にともない当主である小室相模が秋田へ随従し、弟の治左衛門が同地に土着しました。それから約200年の後、小室家のもとに秋田に住む小室家から手紙が届きます。やがて両家は系図などの情報を交換するなかで由緒が一致したようで、時を超えて双方の記憶が結び結ばれることとなります。

江戸時代、常陸国は水戸藩領となりますが、秋田に移った佐竹家中にとってはかつて住み暮らした地として記憶され、分断された由緒を取り戻す活動が続けられました。こうした想いに常陸国の人びとはどのように接していたのでしょうか。佐竹という記憶を介して交錯する秋田と常陸の関わりについて、さらに見つめていきたいと思いますので、情報や記録をお持ちの方は、ぜひお教えてください。

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111(内線344)